<協同のひろば>

『労働者協同組合』の担い手として――黒川先生から学んだこと

河合　満喜子（愛知県高齢者就労事業団専務理事）

黒川先生を講師にお招きし、「いまなぜ労働者協同組合なのか」の学習会を2回にわたって行って来ました。第1回（6／15）、第2回（7／6）、いずれも90分の講義。

参加対象者は、役職員・職場長等の幹部延べ90名。私たちが、学ばねばならない事、又、理解を深めた事、それをどう労働者協同組合発展への可能性に結び付けていくのか。現代の社会構造を変えていくために、発想の転換を講義の中から、まとめてみました。

第1回は「いまなぜ労働者協同組合なのか」の総括的5項目。

1.労働組合運動として行って来た、現体制批判・その政策反対と要求を満たして行くという「メダルの表側」。現体制に取って代わる体制を築く力を蓄えていくという「メダルの裏側」。今まで裏側を考えたことがあったのかという発想の転換。

2.「資本が労働を使う」ようになり、地球環境を破壊する燃料をエネルギー源とし、拡大をし続けて来た第2次産業。この第2次産業を作り変え、廃棄物を資源として再生させるリサイクル産業を興し高齢者・障害者を含めた地域住民の要求充足をめざす第3次産業の発展。人間が知恵を使い「労働が資本を使う」という発想の転換。

3.「労働が資本を使う」ようになるために、財産の「私的所有」（自分だけのため・利己的）と区別される「個人的所有」（自分で働くこと・出資して働く）の再建の土台を築き産業を作り変えて行く。管理することは、搾取する側といわれていたが、管理は必要であり、協同管理・協同労働という発想の転換。

4．人の関係とは全く別にして、株さえ買えば良い（ひいては投機の対象）という人的結合を抜きにして大規模な資本的結合をつくりだす株式会社。大資本のようにお金が集まらない弱点もあるが、地域での人との繋がりを土台に人的結合を前提に強くなっていく協同組合への発想の転換。

5．人的結合を土台にして、地域を作り変えて行くネットワークづくりを進め、又、大規模な資本形成のために協同組合が労働と消費の両方を担って行く。これが事業活動を広め、ひいては信用創造につながる。その事業も協同組合で進めていくには困難さがあるが、国民や地域の人々が公共性がある事業と認めれば、国や自治体の助成対象になる。自分たちで事実を作り、「労働と消費が資本を使う」という発想の転換。

黒川先生は、まだ模索の段階だとしながら今までは、絶対抵抗で進んできた労働組合運動・玉砕主義では闘えないとし、「背水の陣から二枚腰に」メダルの裏表のように両面でものを考え・創造する。そして、発想の転換が必要だとされました。

第2回の学習会では、「高齢化社会危機論」のねらいと高齢者協同組合づくりの意義から。

この学習会では、政府からすでに押し付けられている「福祉見直し論」「年金改悪」そしてゴールドプランのように、厚生省が投げたものなど、国は公的責任を人口の高齢化をたてに回避していることを知り、これを逆手にとって高齢者むけ生活環境整備と高齢者協同組合づくりを、地域づくり運動と合わせて進めていくことこそ私たちの課題とされました。そして、要求・運動を発展させていくためには、「自助努力」が必要だとも言われました。この「自助努力」私どもはすでに実施しております。まず、前年度決算剰余から一定額の積み立て、今年の7月より全団員が毎月100円ずつ給与から積み立てております。この「自助努力」の現状を自治体要請でも説明し、高齢者協同組合づくりに関心と興味をもたせ、関係部局との懇談へと一歩進むことができました。

私たちは、実践しつつあることを黒川先生の学習で確信を深めることができましたが、ちょっと難しかったかなとの高齢者の声でもありました。